

インスタレーションの新しい種。 プロジェクト空間をどうつくるか

「つくりかけラボ02 志村信裕 | 影を投げる」関連トーク

2021年3月27日 千葉市美術館 会議室 (非公開)

志村信裕 (現代美術家)

佐藤慎也 (建築家、日本大学理工学部建築学科教授、八戸市美術館館長)

進行 畑井恵 (千葉市美術館学芸員)

構成・文 白坂由里

「つくりかけラボ02 志村信裕 | 影を投げる」の終盤、建築家の佐藤慎也を迎えて非公開で対談が行われた。芸術文化施設の建築計画やアートプロジェクトを行うことも多い佐藤とじっくり話すのは、4年前に志村がアーティスト・イン・レジデンスをしていたフランスで会って以来になる。つくりかけラボでの活動を振り返りながら、佐藤が2021年度から館長を務める八戸市美術館との共通点や、志村の制作活動の新たな可能性について、担当学芸員を交えて語り合った。



変わっていく美術を 受け止めていく美術館に

畑井 「つくりかけラボ」(以下、つくラボ)は、2020年の美術館拡張リニューアルを機に立ち上げた、公開制作やワークショップを通じて空間をつくりあげていく新規事業のひとつです。ラボ=実験室だから約3ヶ月の会期中に必ずしも作品が完成しなくてもいいし、失敗も成功も同じように面白いものとして、動きがあっていい。そこに実験している作家がいて、鑑賞者も巻き込まれるなかで「つくる」場所や体験を共有できるしくみを目指しました。

佐藤 そこに志村さんを選んだのはなぜですか？

畑井 つくラボには3つのテーマがあり、2020年度は第1回の遠藤幹子さんに「コミュニケーションがはじまる」、第2回の志村さんに「五感でたのしむ」、第3回の武藤亜希子さんに「素材にふれる」と設定していました(新型コロナウイルス感染拡大防止のために会期変更)。志村さんの映像作品は、映像の中に止まらない余白や広がりを持っている。プロジェクションの光をスクリーン以外の対象に映して空間を構成したり、ドキュメンタリー的な映像作品ではいろいろな方とお話した関係性を通じて制作されたりと、周りにあるものを捉える志村さんの手つきが「五感でたのしむ」というテーマにピッタリじゃないかと。フランスでの滞在制作を終えてから千葉県に移住されたので、千葉ゆかりの作家さんとして紹介したいという思いもありました。

佐藤 志村さんは「素材に触れる」も「コミュニケーション」も全部兼ね備えていますね(笑)。

志村 2019年にこの話をいただいたときに、外からの要請ではなく、美術館の内側から変えようとしているのが新しいなってまず思いました。それも単発の企画ではなく通年で決まっていて、いろいろなアーティストにボタンタッチしながら、美術館やアーティストの役割が変わっていく予感がしました。



佐藤 慎也



志村 信裕



畑井 恵

畑井 アーティストの創作や表現は常に予想もしないところに行くので、美術館はいつもその後追いだと私は思っています。歴史化されたものを捕まえて変わらないように保存する施設でありながら、展覧会など様々な事業や人との関わりを通して、少しずつ変わっていくものではないかと。

佐藤 美術館では、若手作家は個展では取り上げられにくいけれど、教育普及の枠であれば企画が通りやすいという側面がありますね。現代作家が美術館の中で活動を行う入口のひとつになっているのではないですか？

畑井 そうですね。新しくなっていく表現をどう捕まえられるか、その際にプロジェクトの場所や時間軸などさまざまな関係性の扱い方を考えるときに、教育普及という枠組みはちょっとした柔らかさがある、フットワークの軽さはあると感じています。

佐藤 美術館の教育普及って、展覧会に関連しているものか関連していないものかに大きく分かれ、展覧会を行う学芸員と教育普及専門の学芸員に分かれている館もありますよね。あらためて考えてみるとどうなのでしょう？

畑井 教育普及は展覧会のプラスαといった考え方がいまだに少なくないですね。けれど、展覧会主義的な状況が急にそうじゃなくなるかもしれないし、そういう構造の危うさはどこにでもあると思います。

佐藤 つくらボの活動は、僕自身が国内外の美術館をリサーチしてきて八戸市美術館で考えようとしているところとかなり重なっていますよ。八戸市美術館はまず、熊倉純子先生（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）たちを中心に、作品を展示して見せるだけではない、アートプロジェクトをつくるような美術館のあり方が構想されていました。その後に僕自身は、2016年に八戸高専で建築を教えている大学の後輩から講演を依頼されて接点ができました。2011年に八戸ポータルミュージアム「はっち」が開館し、2020年に弘前れんが倉庫美術館ができる予定があったし、美術が変わってきているのに対して、それを受け止める美術館が必要だろうと考えていたときだった。それから八戸市美術館のプロポーザル審査に加わって建築プランを選び、運営検討委員会に参加していたら急に館長の話が舞い込んできたわけなんです。八戸市美術館には、つくらボを巨大化したようなジャイアントルームという大空間ができます。カーテンで仕切ると部屋っぽくなるし、可動式の収納や家具もあります。（図を見せながら）

志村 天井高18メートル！

佐藤 ワンフロアにあるので、ジャイアントルームで行われているプロジェクトがメインの展示のようにも見え、奥のホワイトキューブという展示室で開催される展覧会と

ジャイアントルームの活動がどう関係するのか／しないのか、11月のオープンに向けていろいろな可能性を考えていて。

畑井 すごく面白そう！ コロナ禍による社会変動があり、展覧会ができなくなっても教育普及事業としてだったらこれができるといった、何がどうなるのかわからないときに、どこが表で裏かわからない構造で美術館をつくっていこうとしている考え自体に興奮します。

佐藤 アートプロジェクトってある意味では演劇寄りだと思うんです。ものの美術は観客が変わっても作品が変わらないけど、パフォーマンスは観客が変わると作品が変わる。いわゆる普通のライブでも観客のノリが変われば出来が変わることがあるように、アートプロジェクトも参加する人が変われば作品は変わる。今回の志村さんのプロジェクトで参加者がつくるスライドも、来てくれる人たちが違えば違うものができると思ったときに、やはり演劇に近いような感じを受けました。つくらボの3ヶ月間は、演劇でいうと稽古みたいな期間というのかな。ジャイアントルームの中でも、そういう演劇の稽古的な時間と場所をつくる可能性はないかなと考えています。

志村 演劇でも稽古を見せることってありますしね。

佐藤 とはいえ稽古って、最後にできたものが作品であるだろう、という前提があって。理想的には、展覧会の前にジャイアントルームでつくる時間があって、そこから展覧会になるみたいな。ジャイアントルームからホワイトキューブに移っていくという時間の流れの可能性もあるのかなと考えていますね。



八戸市美術館外観 撮影：阿野太一（提供：八戸市美術館）



八戸市美術館ジャイアントルーム（提供：八戸市美術館）

活動をどうアーカイブする？

佐藤 アーティストたちはいわゆる自分の作品をつくることと、つくラボのような活動をどう分けているのか、分けていないのか興味があります。志村さんはどうですか？

志村 作家としての視点でワークショップを開催しているので、予定調和じゃないことがやりたい。アーティストの山本高之さんが「ワークショップも作品だ」って言っていて「そうだよな、そう言っていていいよな」って思ったことがあって。ただし展覧会や作品の批評は書かれるのですが、ワークショップって批評言語があまりない。つくラボで今回やろうとしていることも実験的で面白いんですけど、テキストでは批評されづらいのかなと思いました。

佐藤 その批評しづらいところを言語化する必要がある？

志村 そうですね、だからこそ価値があるというか。展覧会での発表とは違うことを求められるけど、作家のアウトプットのひとつとして価値をおきたい。

佐藤 美術館って、良くも悪くも制度になっていく部分があったり、そこで展示や収蔵されると権威みたいになっていたり、何をしてもそういったものから逃れにくいところだなと思うこともある。一方でアートプロジェクトにずっと関わっていくと何も残らないから、活動を残すためには、作品として保存したり、未来に再現可能にしたりといったことを考えないといけないのかなと。だから八戸市美術館でプロジェクト型作品をやるのであれば、ある部分が収蔵されていく必要があるだろうとは思っているんです。映像に残すことも含めて。そこを考えることで教育普及ともまた違う、美術館にとっての価値にならないか。志村さんは今回の何をどう残すか考えている？

志村 どう残すか……。

佐藤 例えば5年後に何らかの形で展示する可能性があるかもしれない。同じことをそこにいる参加者をつくるとワークショップに近いけれど、あるいは今回のここで起こった出来事を再展示、再演するといったことをどう考えるか。

志村 会期中、どういう時間を一緒に体験し共有できるかに重きを置いていて、残すところまで考えていませんでした。

佐藤 その充実度って測定しづらいもので、集客数の多さやスライドの数で成功でもないし。種を蒔く行為というか、何が花開くのかすぐにはわからないですよね。今回つくられたスライドなどは何らかの形で保管しておく？

志村 大事なポイントですね。考えていくと、作品とは何かということまでいくかもしれない。

畑井 参加人数が少なくても、ある人にとっては人生が変わるかもしれないという変化までを追うとしたらどこまで評価できるか。作品という括弧つきで残す／残さないまで踏み込んで考えないといけないんだなってハッとしました。

佐藤 ジャイアントルームの場合でも、人が活動している状態もある種の展示なんですよ。エッセンスなのか記録なのか何かが常設されていないことには、特に遠方から一時的に来る人にはイメージできないんじゃないかな、ということも考えていて。何を常設するのかって考えると、残す／残さないを考えるひとつのポイントになるかな。

志村 今回は、何か展覧会って言いたくないっていう部分が僕の中にありますね。

佐藤 なぜ展覧会って呼びたくないのでしょうか？



撮影：丸尾隆一

志村 展覧会って、自分にとってはやっぱりフィックスされたものなんですよ。プランを立てて、現実的な問題を解決して実現させたっていうところまでが作品だと思うし、一回フィックスしたらなるべく動かさないのがベストで。今回は、途中で変わってもいいことが前提なので、展覧会と言わない方が自然かなって、そう思いました。

佐藤 先ほど「ワークショップは作品と呼べる」ということだったけど、作品と展覧会はどういう関係性にありますか？

志村 作品は、一瞬でも作品になり得る、たとえ残らなくても。演劇もそうですけど。だから作品は自分にとって手法というか、人とコミュニケーションできる手法だと捉えています。展覧会は完成されたパッケージというのかな。何か意識が違うんですよ。

佐藤 なるほど。じゃあ、つくラボは志村さんのには、一般的な用語で呼ぶとすれば、何？

志村 プロジェクトですかね。便利な言葉かもしれないですけど。

佐藤 僕も今ある言葉で言えばプロジェクトなのかなあと思うのだけど。



撮影：丸尾隆一



アーティストも鑑賞者も ともに活動できる空間づくり

志村 これまでの経験値として、ワークショップでつくられた作品だけでは(つくラボの)130平方メートルある部屋は埋まらないというのはわかるんですよ。間が持たないというか。それで自分の作品と、ラボでつくってもらった作品を混ぜているんですけど。

佐藤 その作業する場所を思いきりつくり込んでいるんですね。

志村 それも込みのプロジェクトなのかなって。週末にはリアルな作家がそこにいるっていう。

佐藤 あのアトリエのスペースのつくり込み方は見事だな。ちゃんとコントロールしてつくっているからプロジェクトって呼べる。ワークショップと呼ぶ人はワークできればいいわけだから備品を借りてやればいいはずだけど、志村さんは空間まである意味インスタレーションとしてつくり込んで、そこに来る人たちがその空間の中で作業するところまで考えている。

志村 今の言葉でハッとしたんですけど、インスタレーションの延長でつくっているのかもしれないです。意識してなかったかもしれないですけど。

佐藤 言い方が悪いかもしれないですけど、映像より、手前の空間の方が今回の新作っていう感じがしたな。

志村 企画書とは別に、作業する部屋と、映像を上映する部屋のドローイングを2枚つくって、上映する部屋はガラス張りのところから小さな子が覗けるようにしたいと畑井さんに話しました。3ヶ月毎に作家が変わって、空間もガラッと変わるという要請を受けていたので、まず空間づくりが腕の見せ所というか、その作家が何を大事にしているか、何を見せたいのかということが問われているのかなと思いましたね。

佐藤 これまでこうした方向でインスタレーションすることはなかった？

志村 「つくラボ」という明確なフレームがあるから、自分の中にあるものをうまく引き出せたのかなと。確かにインスタレーションとして全体を構成していたのかもしれないですね。

佐藤 それを壁から全部つくっていて、アーティスト側がそうしたのも、そんなことができる枠組みになっているのも面白いなあ。アーティストが毎回入れ替わる、3ヶ月間の長期インスタレーションなんだということが表に出た方が入りやすそうな気がします。

畑井 志村さんはほぼ毎週末滞在してくださって、来場者が作品だけじゃなく、それを表現しているアーティストと出会って関係性を築いていく。展覧会ではそこまではなかったことかと。実際、あるお子さんが、1・2回目はお母さんと来て、3回目にお父さんを連れてきた。そんなふうにじわじわ伝わるのもいいかなと思っています。

佐藤 つくラボではそうしたオーダーを毎回出している？

畑井 そうですね。ただ、コミュニケーションの取り方はさまざまで、文通や絵日記交換みたいな仕組み、オンラインでもいいし、お互いに影響を受け得る関係性をつくりたいんですね。来場者の振る舞いや言葉にアーティスト側も何かしら影響を受けて、それによって空間が変わっていくと面白いなど。作家さんと一緒に「つくりかけラボってどんなやろ～」とゆるやかに考えていってもいいかなと思っています。

佐藤 出会いのあるプログラムというのはどうですか？

志村 面白いです。靴を脱ぐからなのか、空間自体の質

からなのか、子どもが映像の前で踊ったり側転したりするんですよ。企画展示室ではこうは動かない、こんな体験の仕方があったんだという発見がいくつもありました。

佐藤 展覧会ではあまり見ることのない、鑑賞する人をじっくり見る機会でもあった？

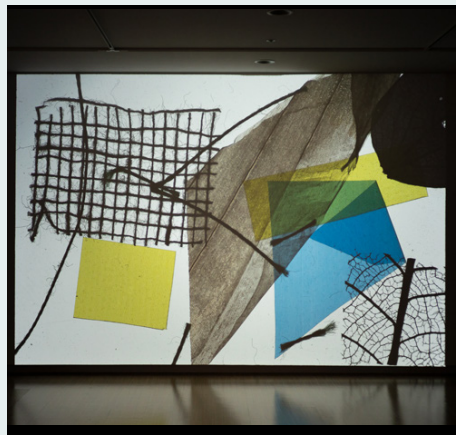
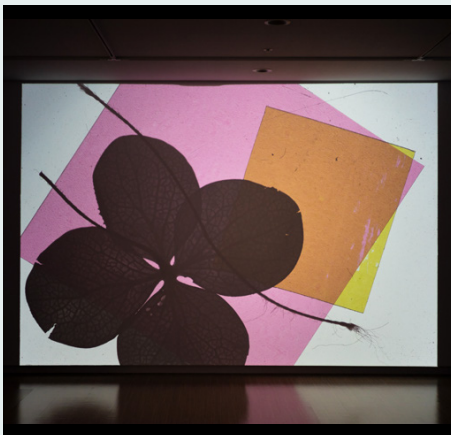
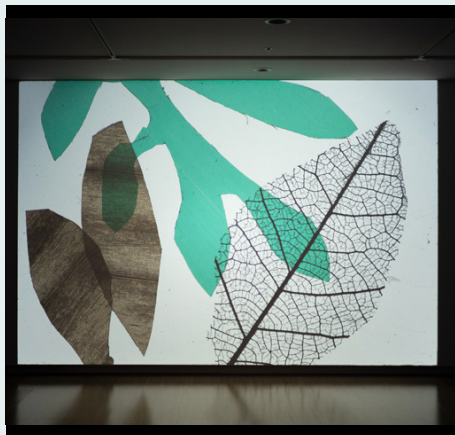
志村 そうですね、例えばボタンや金魚をモチーフにした10年前の映像作品も映しているんですけど、自分の作品のあり方とかまだまだ開発する余地があったんだなって気づいたり。展覧会であればひとつの空間にプロジェクターを5つも設置して、導線がなく視点もひとつだけじゃない見せ方は絶対にしない。けれども今回はラボ（実験室）なので、自分がつくったものと参加者がつくったものをヒエラルキーなく並べたいと思って。相互作用が求められる企画なんですけど、インタラクションじゃなくてインタープレイなんですよ、どうやって来場者と関係を結ぶのか。年代やどこから来たかも違う人々の反応がそれぞれ違って面白。スライドを自分もつくることで、何が他の人と違うんだろうかという視点も生まれるでしょうし。

佐藤 映像と同様に、そこでつくったスライドが並列に来る（上映される）体験って面白い。

志村 だから作品にキャプションもつけなかったんですよ。たぶん小さな子どもは同じように見えて、そのくらい自由な見方が面白い。とはいえ、スタッフの方は、ある種ファシリテーターのようにお客さんに合わせてナビゲートしてくださっています。僕がいるときは、向こうから質問してくれることもあれば、僕から話しかけたり。手前のアトリエのところに置いてあるカメラから対話のコミュニケーションが生まれたり。

佐藤 そこにアーティストがいることの意味が考えられる気がするな。

畑井 美術ってわからない、知識や背景などたくさんの情報に裏付けられたとしても、すべてが「わかった!」とまでにはならないもので、だからこそ意味があるのだと提示していくものだと思います。わからなさはどう寄り添えるか、寄り添い方の手つきを一緒に考えていくのが教育普及じゃないかと思うんです。学芸員も答えを持っているわけじゃなくて、他者の表現って突き詰めるとやはりどうしてもわかり得ないかもしれない。でもその場と一緒に入ってみようという体験がつくラボではできるのではないかと思います。



撮影：丸尾隆一

部室のような、
子どもたちが訪れやすい場所に



撮影：丸尾隆一

佐藤 フランスでのレジデンスを経て変化はありましたか？

志村 ええ。印象的だったのは、子どもの頃から美術館でキュレーターの話を聞いて作品を見るという土壌ができていたのが羨ましかった！2年間の滞在で良いものを沢山見ることができたので、自分の経験を還元すると思ったら、子どもたちに伝える仕事もあるんじゃないかと思うようになりました。つくラボみたいに、美術館と協働して美術に慣れてもらう機会をつくるのが大事だと思っています。

佐藤 そう、ヨーロッパではみな美術館に慣れてるよね。震災直後に、豊島区にあるコミュニティーセンターで演劇のプロジェクトがあったんですが、この会議室をどう居心地良くするか考えるにはまず「いる」ことが大事だって、2、3時間寝転がったり座ったりして時間を過ごすことが稽古だったんです。役者たちは時間をかけることによって見えてくるものを大事にしている。人が長時間活動するために居心地がどう繋がっていくか。つくラボで「靴を脱ぐ」というアクションもそのひとつかもしれない。

志村 部室みたいになったら良いなって思っていて。小

さい子だけでなく、中学生や高校生にとっても学校以外に集まれる場所になったらなって。

佐藤 3ヶ月おきに部長が変わる(笑)。3ヶ月という期間はどうか？

志村 期間が長いからこそできることもあるなと思いました。他の美術館の教育普及の方も来てくださったのですが、コロナ禍での活動のヒントを求めているように思いました。

畑井 コロナ禍でもやれることを一緒に探ることができた。やるかやらないかだけでなく、今ならこれはできるようになって考えながら変えていけたのは、運営側としても良かったです。

佐藤 美術館にこうして蓄積されてくると、本や映像以外にもクリエイティブなドキュメントの可能性がありそうですね。

志村 映像や活動を見せる空間をどうつくるか、活動をどう残すか。新たな課題をいただけてお話しできて良かったです。

畑井 私もアーティストも教育普及される側になると思っています。美術館にきた小学生から10年後に変化が戻って来るかもしれないし。学芸員も作家も鑑賞者もお互いに時間をかけて影響し合う場ができていたのかもしれない、それこそ美術館なんだと思いをあらたにしました。



撮影：丸尾隆一



撮影：丸尾隆一

志村 信裕(しむらのぶひろ)

現代美術家。1982年東京都生まれ。現在は千葉県を拠点に活動。2007年武蔵野美術大学大学院映像コース修了。2016年から2018年まで文化庁新進芸術家海外研修制度により、フランス国立東洋言語文化大学 (INALCO) の客員研究員としてパリに滞在。近年の展示に「志村信裕展 遊動」(KAAT神奈川芸術劇場、2021年予定)、「生命の庭-8人の現代作家が見つけた小宇宙」(東京都庭園美術館、2020年)、「志村信裕 残照」(千葉県立美術館、2019年)、「六本木クロッシング 2016 僕の身体、あなたの声」(森美術館、2016年) など。
<https://www.nshimu.com>



撮影：川瀬一絵

佐藤 慎也(さとうしんや)

建築家、日本大学理工学部建築学科教授、2021年4月、八戸市美術館館長に就任。1968年東京都生まれ。1994年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。アートプロジェクトの構造設計、ツアー型作品の制作協力、まちなか演劇作品のドラマトウルクなど、建築と美術、演劇の空間について研究・計画・設計を行う。「アーツ千代田3331」改修設計(2010年)、「アトレウス家シリーズ」(2010年〜)、「としまアートステーション構想」策定メンバー(2011〜17年)、「みんなの楽屋」(あわい〜、2017年、TURNフェス2)、「東京プロジェクトスタディ」ナビゲーター(2018〜21年) など。